

この世界で私達は生きる

鉄血

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ゾンビが溢れかえったこの世界で俺達は私達は生き続ける。

第一
話



目

次

6 1

第一話

三人の男性が街から離れた人気のない山頂の展望台でキャンピングカーでキャンプをしていた。一人はコンクリート製の手すりに座り、ナイフを手入れしながら双眼鏡で街を見ている男性に聞いた。

「どう？ 海斗？ 街の様子は？」

双眼鏡を持った男性に、コンクリート製の手すりに座った男性が聞いてくる。

そんな彼に対し、眼鏡を掛けた男性は肩を潜めながら口を開いた。
「昨日と変わつてねえよ。そもそもこの街の生存者の殆どが都市部に逃げてる。この観光スポットしかない街にこうやつているのは俺達みたいなはぐれ物か、ゾンビ化した人間くらいだよ」

「だよねー・・・」

海斗の言葉に手すりに座った男性が、キャンピングカーのラジオをいじつている男性に言つた。

「そーちゃん。そつちはどう？」

彼の呼びかけに、身長が他の二人より小さい男性が言う。

「やつてる。でも何の意味もねえ。そもそもラジオやつてんのか？」

そーちゃんと言わされた男性は半部投げやりになり、こちらへ歩いてくる。

「海斗。生存者はいるか？」

「んー・・・確認してるけど、今の所は無し。相馬の予想が外れるほどにな」

「前に壊滅したアリーナの生存者が逃げ回つてているとは思つていたんだが・・・全滅したか」

「そもそも、武器持つてないだろ？ あそこの奴ら。それに生きてたとしても、俺達を殺しにくるしな」

海斗はそう言つて、相馬に双眼鏡を渡す。

すると隣に座つている男性が言つた。

「そーちゃん、俺達もどうする？ 食料はまだあるし、海も近くにある、山もあるから現地調達は出来るけど、男三人だと出来る事なんてたか

が知ってるよ?」

そんな彼に相馬は双眼鏡を覗き込みながら口を開く。

「わあーてるよ、零。たく、俺達もそろそろ此処から移動するか?」

街外れの展望台なので安全確保も出来るし、近くには店舗もあったので雨風や食料を確保する事ができた。もう、しばらくは此処にいても大丈夫なのだが……と思つた矢先。

「…………ん?」

相馬が眉をひそめて、双眼鏡を見る。

三人の人影が走つてゾンビ達から逃げている。

それを見て、相馬が二人に言つた。

「零、海斗」

「ん?」

「なに?」

二人はそれぞれ反応して相馬を見る。

そんな二人に、相馬が言つた。

「生存者三人見つけた。場所は……鵜島の交差点だ。向かう方向は場所的にショッピングモールだろう」

相馬は口を一度閉じると、再び口を開いた。

「助けにいくぞ」

相馬の言葉に零と海斗は――――――

「りょーかい」

笑つて、武器を取つた。

◇◇◇◇◇

「はあ、はあ、はあ……っ! 凜ちゃん! 大丈夫! ?」

白髪の少女が黒髪の少女にそう聞いてくる。

「大丈夫……っ! まだ、走れる! 」

凛に対し、茶色の髪の少女が言う。

「無茶しないでよね! 理央は大丈夫! ?」

「私もまだ大丈夫だよ唯ちゃん!!」

三人で励ましあいながら、彼女達はゾンビの群れから逃げる。

「・・・はあ、はあ！しつこいわね！コイツ等!!」

凛が叫ぶ。

彼女は疲弊する身体に鞭を打ちながら、走り続ける。

「理央！この先にショッピングモールがある！そこに入るよ！」

「うん、分かつた！唯ちゃん!!」

三人はショッピングモールの中へと入つていき、二階へと駆け上がつた。

「はあ、はあ、はあ・・・やつと、一息・・・つける」

凛は、そう咳きその場に座り込む。

「この街もゾンビだらけ・・・何処に逃げればいいのよ・・・」

唯も精神的に辛くなつてているのを見て、理央は咳く。

「唯ちゃん・・・」

理央は一人を心配しながら下の階を覗きこむ。

そこにはゾンビが大量に蠢いている。

ゾンビ達が階段を登るのに時間がかかるのが唯一の救いだ。

だが、それも時間の問題である。

いずれは上に上がつてきて、追い詰められてしまうだろう。

そんなタイムリミットがある中で理央は周りを見渡した。

この広いショッピングモールには沢山の店舗が並んでいるが、周りには誰にもいない。

三人の荒い息が館内に響く中で、エスカレーターからゾンビ達が這い上がってきた。

「つ！上に逃げるよ！」

理央がそう叫び三人は上の階へ上がっていく。

そんな三人の後ろからゾンビ達が追いかけてくる。

階段を使い、屋上へと向かう。そして三人が屋上の駐車場に到着した。

「「・・・つ!?」」

屋上の駐車場に蠢くゾンビ達に三人は足を止めた。

「・・・囮まれた！」

「どうするのよ!?」

「……ど、どうしよう!?」

三人がそう言つたその時だつた。

“ブー!!ブー!!”

「「「…………!?」」

突然の車のクラクションに三人が顔をクラクションがなつた方向へ向ける。

そこには一台のキャッシングカーが爆走していた。

そのキャッシングカーが、屋上の駐車場に向かう道を通り、彼女達の前に止まつた。

運転席には一人の男性が座つてゐる。

その男性が理央達に視線を向けると、窓を開けて言つた。

「さつさと乗れ!!」

男がそう言つて、キャッシングカーの後ろの扉を開けた。

そこには二人の男性が手を差し出してきた。

「早く!早く!」

「さつきのクラクションで集まつてくるから早く乗れ!!」

理央達はお互いの顔を見合させ頷くと、キャッシングカーに乗り込んだ。

「そーちゃん!!出して!」

高身長の男性が運転手にそう叫ぶと、そーちゃんと言われた男性は車のアクセルを踏んだ。

激しいエンジン音と共に、車が急発進する。

ゾンビが後ろを追つてくる中、眼鏡をかけた男性が布を受けた瓶を取り出すと、布に火をつけ、窓の外からゾンビ達に向かつて瓶を投げつけた。

パリン!!と瓶が割れる音と共に、中に詰められていたアルコールがゾンビ達に一気に着火した。

「ヴォオオオオオオオ!!」

氣味が悪い叫びが辺りに広がる。

炎上するゾンビ達は次々と倒れていた。

安堵する私達は椅子に座り込む。

眼鏡の男性は窓の外から身体を乗り出していたが、もう大丈夫だと思つたのか窓を閉めて椅子に座る。

と、目の前の長身の男性が私達に言つた。

「危なかつたね。大丈夫?」

「は、はい・・・」

理央はその男性にそう答えると、眼鏡の男性は私達に水が入ったペットボトルを差し出した。

「ほらよ。走つてきたから疲れてるだろ?飲みな」

そう言つて眼鏡の男性は窓の外へ視線を向ける。

私達は出された水を警戒しつつも、その蓋を開けて水を飲み始めた。

「ふはっ!!」

沢山の水を飲み、生き返る気分になる私達を見て、男性は微笑むと私達に言つた。

「話は安全な所についてからしよう。それまでは休んでて」

彼はそう言うと、私は安心して瞼を閉じた。

第二話

キャンピングカーが、蠢くゾンビと死体しかない道を進み続ける。
そんな中、車を運転している相馬が口を開いた。

「……寝たのか？」

静かになつた後部席が気になつたのか、そう聞いてくる相馬に零は言つた。

「うん。ぐつすり寝てるよ。それほど追い詰められていたんだろうね」

「……そうか」

零の言葉を聞き、相馬は街外れの道を通る。

今から第一拠点に戻るとマズイと判断したのだろう。相馬がこの道を通るということはこの鵜島町から十キロ以上離れたリゾートホテルのさらに先にある、第二拠点の自然公園だろう。

あそこなら確かに人が来ることなどない。

しかもこの地獄のようなパンデミックが起こっているこの時代に誰も危険を犯してそこまでくる奴などいないだろう。

しかも、相馬が通つている道は国道ではなく、裏の道だ。木々が生い茂つて空から見られないようにしているのも、山を越えた鳴神町の陸軍に見つからないようにする為だ。

車の中で女の子三人の寝息がこの空間に広がる。

そんな中、窓ガラス越しで周りを監視していた海斗が相馬に聞いた。

「なあ、相馬」

「なんだ？」

相馬は運転を続けながら返事をする。

「こいつ等何処から來たと思う？」

誰よりも彼女を警戒しているのは海斗だった。

彼は仲間意識が高い人間だ。他の地区から來たであろうこの三人に対して自分達に危害を加えないかを警戒している。

そんな彼の質問に相馬は答えた。

「まず俺が言える答えだが……まずこの辺りの奴じゃない」

白髪の少女達が着ていた学校の制服を思い出し、そう答える。

「まず、今このパンデミックが起こっているこの時代で、学校に通える奴なんてそう多くはない。この時点でこの辺りの奴じゃないって事が分かる」

あのパンデミックから、はや一年ちょっとと経つ今でも復旧の目処は立っていない。

なぜなら？あの周りにいるゾンビが原因だ。

こいつ等の体液を取り込んだりしてしまふと、同類になつてしまふこのウイルス。

そのゾンビ達を始末しようとして軍隊が動くも、数の暴力で負け、今となつては他国も鎖国に近い状態だ。

そんな中で、学校に行けるような場所となると――

「五大防衛都市の住民……だろうな」

「ハア!?」

「嘘でしょ!?」

相馬の仮説に二人は驚愕の声を上げる。

五大防衛都市。

それは、日本に住む人類の最後の砦。東京を筆頭に函館、名古屋、大阪、那覇の五つの都市が上げられる。

そこには巨大な壁で仕切られており、外部の人間が入つて来れないよう仕切られている。

外で暮らしている彼らにとつてはどうでもいい事だつたが、そこから来た奴だと話は違つてくる。

「ちよつ、ちよつと待てよ!!五大防衛都市!?なんで今の日本で一番安全な場所から人が出てくるんだよ!?普通あり得ないだろ!?」

海斗が普段は見せない、焦りの声を上げている。だが、相馬は慌てる事なく言葉を続けた。

「それがあり得ない話じやないんだよ。今から大体一週間前に何があつたか、覚えてるか?」

「一週間前……?確かに、その頃からラジオが使えなく……」

「それだよ」

零のつぶやきに相馬は正解だと答えた。

「今でも、ラジオが使えない理由は恐らく・・・名古屋の防衛都市がかなりの被害を受けたからだろうな」

卷之二

今まで聞いていたラジオの発信源は名古屋防衛都市からだ。

それが今の今まで通信が途絶えている。ということは考えられる

のは
つだ

?

「あくまでも予測だ。本当かどうかは、彼女達に聞いてみなけりや分
からん」

相馬はそう答えて、運転を続ける。

う・・・うん・・・?

白髪の女の子が目を覚ます。

そんな中で、相馬が口を開く。

「れ

は、はい・・・わかりました・・・」

そんな中で

んな冷静なの!?」

零の発言は「もつとも」である。だが、白髪の女の子は零に言つた。

「運転手の方……悪い人じゃないと思ってたの……」

零は彼女を見て、そうつぶやく。

くりくりした丸い瞳が零達を見つめる中、黒髪の少女が目を覚ました。

「理央? うるさいわよ・・・つて・・・」

「あ」

零と海斗は黒髪の少女と目が合う。

そして――――――

「きやああああああ!? この変態!?!」

「は!? へぶう!?

近くにいた海斗が引つ叩かれた。

ぱしーんと痛い音が響く。

そんな中で、相馬が車を止めた。

「おーい、到着したぞーって、何やつてんだお前ら?」

顔を赤くする黒髪の少女に、床に倒れ伏せる海斗。椅子の真ん中できちんと座る白髪の少女に爆睡している少女と、慌てる零。そんな愉快な様子を見て、相馬が一言。

「騒ぐなら、彼奴等にバレねえ程度で騒いでくれよ?」

相馬は一人、そう呟いた。